

第2回協議会・第7回企画調整部会での委員意見（抜粋）

- インタビューに参加しまして、社会参画に繋がるネットワークの使い方については、少し課題があるのではないかと感じました。また、情報ネットワーク社会の中で、メディアの空間と、それをフォローするようリアルな空間との繋がりの環境の豊かさといったものも考えていく必要があるのではないかと感じました。また、自分をどのように構築していくのかという自分づくりをベースとするような環境の視点も必要ではないかと思いました。また、インタビューの中で、当然ですけれども若者は一様ではありませんので、情報ネットワーク社会の中での関心や関わり方には、当然、非常に幅があります。そうした中で、情報をどのように扱えばいいのかという不安もあるといった声もありました。そうした幅広い課題や問題意識などがあつたと感じています。

- 曖昧なコミュニケーションで、相手にどうとでも取ってもらおうようにするということがありました。それは、自分が傷つかないようにというよりは、他人を傷つけないように、すごくコミュニケーションに気を使っているのではないかと感じました。既読無視も、自分が既読無視をして、嫌だということではなく、既読無視していないよ、あなたのことを気にかけているよというように使っているのではないかと感じました。

- SNSで信頼関係が構築されるかということについては、ネットで知り合って、ネットだけで深まるということはほとんどなく、現実で繋がった人との信頼関係を維持することや、深めるといふ人がいました。信頼関係は、ある程度、現実でできたものを反映させる場という意識の人が多かったです。それは、信頼関係だけではなく、大人数のグループで発言をするときにも、例えば学科のLINEで100人ぐらいだと発言しづらいことや、サークルですと自分が幹部の立場だと発言しやすいという、現実の人間関係がSNSでも結構直接反映されるのではないかと思いました。

- 他人への評価はあまり積極的にしないし、他人から積極的に評価もしてもらえない。そうすることを嫌がっているのかもしれない。つまり、関係性は、評価をしあう関係ではなくて、先ほど坂本委員がおっしゃっていましたが、傷つけ合わないような関係ということをあえて作っているのではないかということです。非常に表面的なと言うと語弊があるかもしれませんが、表面的なキャラクターが明るいとか、暗いということで、とりあえず、必要性に応じてある種の友達層や相手方を分類していると思ったのですが、そういった傷つけあわない関係をあえて作ることによって、生活をしているということが現状かなと思って聞いていました。

- コミュニケーションツールによって発信の仕方が違うなと思いました。つまり、ツイッターのように不特定多数の誰でもみることができるものは、匿名性を利用して複数の自分のアカウントを作って結構本音の部分を発信する。本音を書いても、ばれないという前

提だったと思います。ところが、相手がいるようなある種パーソナルコミュニケーション、或いはコミュニティの中でのコミュニケーションみたいなものは、さきほど申し上げたようになり気を使って、そのコミュニティからはじかれられないように、相手を傷つけないようにしているのではないかなと、それがLINEではないかと思います。

コミュニケーションツールとして、我々の世代、或いは青少年問題協議会がどう関わるかということは、そういうツールとしてどのように使っていくかということも少し考えなければいけないのだろうなと思いますし、そういう傷つけない関係というのが前提にあることが、コミュニケーションによって人が育つかという、それが人を育てるような体験に結びつくのかということころは、もう少し研究しないといけないと思いました。

- 本当の信頼関係というのは、人と会って、日々の生活の中で作っていくものだと思っていると。あくまでも、情報ネットワークは、日常生活で便利に使っている、情報ツールという意味で便利に使っているということでした。もう一つは、明らかに自分の趣味の世界を広めるために使っている。それもやっぱり情報ツールとして使っているということで、私も情報ネットワークを使って育成事業になるのかなと、自分のインタビューの中ではちよつと思いました。
- 若者の中でも対極があるから、本当にこのSNSのツールの使い方は、何が一番最適化なのか、話を聞きながら、私自身もどうやったらいい方法でいろんな若者が関わっていいのかと考えていました。やっぱりタイプ別や段階別など、一つで答えを出せない。
- ヒアリングに応じてくれた人たちは、リアルに繋がっている人とのコミュニケーションツールとして使っていました。想像していたよりも、自己承認要求を満たすためのツールとして使っているように感じられず、仲間とコミュニケーションをとる頻度が多かったです。SNSは割とリアルな人とのやりとりで使っているという人が、ヒアリングのメンバーには多かったです。だから、大事なことは会って話すと言われて、そうなのかと思いました。
- 一様に感じるのは、文章を書くのに抵抗感があることです。きっちりと文章を書くことが面倒くさいという感覚は聞こえてきました。
- ひきこもっていた時から SNS、特に Twitter と YouTube を見ているケースが多く、ひきこもっているときは、そういった情報をインプットしていたということが大半でした。(中略) インタビューを受けた子は、みんな Twitter の色々なつぶやきを見て自分だけじゃないということで、励まされて動き出したという経緯もありました。実際に本人が動き出し、就労支援の場に繋がると、今度は自分自身が表現の場として、Twitter とか YouTube を使いたいと変化し、特徴的だったのは、思いついたからといってすぐに投稿するのではなく、長い子では2年ぐらい技術を磨いて研究して、人に見てもらえるものかどうかということ

をちゃんと考えて丁寧な対応で外に出し、表現の場をすごく大切にしています。かつ、よりみんなに見てもらおう。高度なものかわかりませんが、自分よがりにならないように気をつけているということがすごく印象的でした。特に、つまずいてしまった若者たちは何らかの形でいじめなどの経験があるので、言葉をすごく意識しています。Twitter などに関しても、言葉の重みをすごく言っている方が何人かいて、言葉に関して、すごく勉強して、自分で投稿していますという状況でした。

- すごく共感をして欲しいということや、新しい知識や新しい理解も欲しいということや、楽しいということもすごく大事だという、情報ネットワークの中に強調されるコミュニケーションなのか、リアルなコミュニケーションでも同じような観点で、捉えているのではないか、リアルとバーチャルの重ね合いのような形で理解をする方が何かしっくりくるなと思ったことがあります。
- うれしいとか楽しいという共感とか感情の表現がすごく自然に入っており、そのやり取りが、SNS でもされているということに間違いはなくといいますか、されているという前提で話が進んでいたので、その価値観や感情が、トラブルになる原因にもなっているのではないかなと
思いました。ですので、言葉で、やりとりを対面ではなくタイムラグがあり、文字でやりとりをする中で感情のやりとりがされているというところが、非常に特徴ではないかなと、しかもすごく相手に気を使いながら表現を心がけているという話は、かなり共通で話していたように感じました。
- 情報発信ということは、あまり話が出てきませんでした。情報発信というのは、自分が
どういうふうに、例えば社会に関わっていくかといった、社会参画に関わる話はなく、今回、田中委員がまとめてくださったSNSの使い方タイプ分けの中でもアウトプットのところに、そうした社会の繋がりが関わるような、社会参画や社会参加といったものが入っていないと思うのですが、そうした話は私も聞けなかったな
と思いました。リアルな生活の中に、SNSなどの情報ネットワークが日常の中に入っているけれども、今のところそれを利用して
いるという形で、積極的にそれがリアルな生活とバーチャルな空間と結びつけて、質の高い生活環境にしていくにはどうしたらいいのかという、つなげていくことも、課題になっていくのではないかと感じました。
- 今までは、自分の仲間や地域、家族といったところで、自分の居場所を作っている
ことが普通に起きていたのですが、だんだんと仮想の情報ネットワークの世界で自分の主義や、同じ考え方などを見つけていき、居場所を見つけるということも一つの手かもし
れません。
- 自分を知る、他者を通して自分を知ることは、コミュニケーションの本質だと思うのですが、そこまではロボットではなかなかいかないの
だろうと思います。それは、キャラが

沢山ある。他者あるいは自分もそうですが、コミュニケーションをしても自分がどういう存在なのかということがなかなかわからないのではないかと思います。そうすると、ますますというところちょっと変ですが、自信が持てないことや、自己肯定感が高まらない。それは、自分を知らなければ高まりようがないわけです。そういうことや、さらに傷つきたくないということで、ますます相手を傷つけないということになるのではないかと思います。それを、どのように、いい方向にもっていけるのかなと考えています。

- 意欲があるタイプと、意欲がないタイプということで、いろいろとお話を伺ったのですが、共通して、笹井先生がおっしゃった通りに他者の目を気にすることが共通項として出てきているのかなと思います。自分を知るということは、自己肯定感がやっぱりSNSを通して、特につまづきがあった子たちは、「いいね」をもらったことで自己肯定感が高まっているわけではないのです。「いいね」をもらったからといって、自分自身がもらっているのではない。投稿している写真や絵に対しての「いいね」だから自分ではないということでした。個人的な意見ですが、自分が撮った写真や描いた絵なのだから、自分が褒められたと思うのではないのかなと、私は思ったのですが、そういうふうには思わないというところが、今の若者と自分たちのジェネレーションの人達との違いをすごく感じました。自分達のジェネレーションの人達は、フェイスブックを使っている方たちが、どんな写真でも全部フェイスブックに出して、「いいね」をもらった数を競い合う人も中にはいて、自分が褒められたような思いで生活している人もいるので、親御さん世代と全く違うという。何となく、他者の目を気にするということも、何かその軸が違うような気がします。他者の目を、大人世代も気にしているのですが、ちょっと他者の目を気にする仕方が違うと感じています。とりとめのない意見なのですが、その辺について、もっともっと深くしていかないと、対処法が見えないと思ったことが、私の個人的な意見です。